

この10年間のあゆみ

当研究室は、荒川泰昭教授が東京大学医学部衛生学教室（当時2年間、米国ユタ大学医学部客員教授として出張中）より赴任し、初代主任教授として公衆衛生学研究室を開講しました。以来10数年間を経、現在までに多くの学部卒業生、大学院修了生、博士号取得者を送り出しています。

衛生学・公衆衛生学という学問は、「生を衛る学問」であり、「健康で長生きするための策」を研究する学問です。その背景には、「如何に生きるか」あるいは「如何に死ぬか」までも言及されるべき分野が存在します。研究室では、健康の増進や阻害を免疫、脳機能、内分泌などの生体機能や疾患の面から、さらに栄養や中毒の面から、微量元素の領域で研究しています。研究テーマとしては「生体機能（免疫、脳神経、内分泌）と微量元素—生体機能の栄養・毒・制御・調節・障害—」、「疾病発症ならびに臨床・診断治療と微量元素」、「生体元素の体内恒常性の攪乱と症状発現」、「微量元素の有効性と安全性—薬効・栄養・毒性の探索ならびに検証—」が挙げられ、モデル実験として相反誘因なるも類似症状を呈する有機スズ暴露（毒）と亜鉛欠乏（栄養）による病的老化を利用して生理的老化の引き金（要因）となる接点や経路を探索する研究を進めています。

教育面では、「公衆衛生学 I」を学部3年生に、「公衆衛生学 II」、「健康管理概論」、「環境衛生学実験」を栄養学科3年生に、また、栄養学科4年生には「管理栄養士国家試験対策講座」として「公衆衛生学・健康管理概論（社会・環境と健康）」を開講しています。大学院では生活健康科学研究科の修士課程を対象に「生体衛生学特論」が開講されています。

この10年間で、研究室にもいくつか変化が見られました。一番大きな変化は、研究室が環境汚染の学部棟6階から新設された増築棟の3階に移ったことです。大学の西側角に位置し、眺望は抜群です。教員室、研究室とも以前に比べて格段に広くなり、さらに細胞培養室が隣室に設けられ研究環境は恵まれたものとなりました。

次に、荒川教授は多くの学会をリードされており、この10年間で、米国（4度目）、イタリア（3度目）、ロシア、ラトビア、ベルギー王国（2度目）、仏国、英国、ドイツ、中国、マレーシア（2度目）、シンガポール（2度目）、台湾（3度目）などでの特別招待講演のほか、7つの国際学会あるいは国内学会（全国大会）を会長あるいは会頭として主宰されました。とくに1996年にはベルギー・ブリュッセルにてNATO最先端研究・国際ワークショップ「スズと悪性腫瘍細胞増殖」を、また1998年には中国・武漢にて第2回国際シンポジウム「食物連鎖と微量元素」をそれぞれ議長として企画・運営し、国内においては2000年と2007年に京都にて第18回および25回の日本微量栄養素学会を2度にわたり会頭として主催されました。さらに、2002年には第9回日本免疫毒性学会を会長として、2004年には日本薬学会主催「第14回金属の関与する生体関連反応シンポジウム」を会長として、そして今年（2006年）7月には、第17回日本微量元素学会を会長として、いずれも静岡市（グランシップ）にて主宰されました。また、荒川教授は日本微量元素学会の理事長に就任されており、日本微量元素学会の事務局本部が本研究室内に設置されています。荒川教授は他にも日本免疫毒性学会をはじめ各種学会の名誉会員、顧問、理事、評議員として学会運営を担っておられます。

研究室の年間行事としては、2～3月の研究室の卒業生・新入生の歓送迎会、5月の学会参加を兼ねた豪華な京都旅行、10月末の大学祭（剣祭）での研究室公開などが恒例のものとして続けられています。

（助手 栗山孝雄 記）



第17回日本微量元素学会 平成18年7月13日 於グランシップ